

愛知県常滑市（国内 20 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和 7 年 1 月 6 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 基本情報

用途（飼養羽数）：採卵鶏（約 8 万羽）及び採卵用育成鶏（約 4 万羽）

発生家きん舎の構造：セミウインドウレス鶏舎

発生家きん舎の飼養形態：ケージ飼い（直立 8 段ケージ 4 列（1 階・2 階各 4 段）、
通路 6 本）

2 施設の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は、海沿いの丘陵地に位置する。農場の周辺は収穫済みの水田に囲まれており、二番穂が出ているところもあった。
- ② 当該農場は、1 月 2 日に発生が確認された今シーズン国内 17 例目発生農場（愛知県 1 例目）と一般道を挟んで隣り合っていたが、それぞれの発生鶏舎どうしは 100m 以上離れた場所に位置していた。
- ③ 調査時、当該農場周辺の水田や 17 例目の最寄りの雑木林や竹林では、複数のカラスやスズメ等が確認された。
- ④ 当該農場は、セミウインドウレス鶏舎 3 棟（成鶏舎 1 棟、育雛舎 1 棟、育成舎 1 棟）、空き鶏舎 2 棟、集卵施設、堆肥舎等で構成されていた。発生鶏舎は成鶏舎であり、当該農場内の 17 例目農場寄りに位置していた。

3 通報までの経緯

- ① 農場主によると、発生鶏舎（通報時約 326 日齢）では約 8 万羽の採卵鶏が飼養されており、通常の死亡羽数は 1 日当たり 10 羽程度であったとのこと。
- ② 農場主によると、1 月 5 日午前中の見回りの際、発生鶏舎で計 7 羽の死亡鶏が確認されたとのこと。死亡が散在していたことから様子見としていたが、同日午後の見回りの際、当該ケージ周辺の複数ケージで死亡の増加が認められ、計 49 羽の死亡鶏を確認したことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。発生ケージは鶏舎の中央付近にあり、直立 8 段ケージの下から 6 段目（2 階部分の下から 2 段目）に位置していた。
- ③ 農場主及び立入した家畜保健衛生所によると、発生鶏舎については、通報があったケージ以外特段の異状は認められなかったとのこと。調査時、その他の鶏舎についても特段の異状は確認されなかった。
- ④ 当該農場では、1 月 3 日に育雛舎 1 棟で気温低下によるものと推察される育成鶏の死亡増加が確認されたが、家畜保健衛生所が実施した高病原性鳥インフルエンザの簡易検査の結果、陰性が確認されていた。

4 管理人及び従業員

- ① 当該農場には、農場主を含め従業員が 5 名おり、鶏舎内の飼養管理に従事していたとのこと。鶏舎の担当は専従にはしておらず、その日毎に担当が決められていたとのこと。
- ② 他農場との人や機材の共有は行っていないとのこと。

5 施設の飼養衛生管理

- ① 当該農場の車両入口にはゲート等の設置はなかった。衛生管理区域入口となる集卵室前付近に関係関係者以外立入禁止の看板と蓄圧式消毒器が設置されていた。農場主によると、普段は農場の衛生管理区域内に進入する車両はなく、飼料運搬業者、集卵業者、堆肥搬出業者は、衛生管理区域外から搬入・搬出を行っているとのこ

と。

- ② 従業員が農場内に立入る際は、事務所兼技能実習生住居の前の入口から入場し、倉庫前にある更衣場所において農場内専用作業着と専用長靴に交換し、手指消毒を実施した上で衛生管理区域に立入っていたとのこと。
- ③ 外来業者（雛の導入業者や廃鶏出荷業者等）が農場の衛生管理区域に立入る際は、持参した作業着と長靴に交換し、手指消毒を実施していたとのこと。
- ④ 従業員が鶏舎に立入る際は、鶏舎入口に設置された踏込消毒槽（逆性石鹼、毎日交換）で靴底消毒を実施し、鶏舎専用長靴への交換及び手指消毒を実施していたとのこと。
- ⑤ 発生鶏舎内部は隔壁により2分割されており、分割された区画毎にオールイン・オールアウトを実施しているとのこと。各区画には当該農場内の育成舎から約120日齢の大雛を移動しており、直近では発生区画とは別の区画に令和6年12月上旬に移動していた。なお、発生鶏舎の隔壁は内部を完全に仕切るものではなく、鶏舎前後で従業員が行き来できる構造になっていた。
- ⑥ 発生鶏舎は妻側手前から入気し、奥のファンから排気するトンネル換気となっていた。入気口、排気ファンには金網が設置されていたが、入気口の金網の一部に隙間が見られた。冬季は入気口の一階部分はカーテンが閉められ、2階部分からのみ入気していた。排気ファンのシャッターは自動で開閉するが、埃の蓄積により一部は閉鎖不良となっていた。
- ⑦ 飼料タンク上部には蓋が設置されており、閉鎖系ラインで鶏舎内に繋がっていた。
- ⑧ 給与水には、消毒済みの地下水を使用しているとのこと。
- ⑨ 集卵コンベアは発生鶏舎の2階部分から鶏舎外に出ており、鶏舎外出口にはシャッター等の設置はなく、コンベア上部のみカバーが設置されていた。
- ⑩ 鶏糞は、週に2回、除糞ベルトを稼働させて鶏舎外に搬出しているとのこと。発生鶏舎の鶏糞搬出口は地下部分に設置されており、搬出口にはシャッターが設置されていた。
- ⑪ 農場主によると、死亡鶏と廃棄卵は毎日の見回りの際に回収し、堆肥舎に投入し、鶏糞とともに発酵処理していたとのこと。ただし、国内17例目農場で本病が発生した1月2日以降、死亡鶏は鶏舎内に保管していたとのこと。
- ⑫ 堆肥舎には防鳥ネットが設置されていたが、農場主によると、まれにカラスが侵入することがあったが、鳥インフルシーズンに入ってから確認されてないとのこと。
- ⑬ 農場主によると、国内17例目の発生以降、鶏舎の破損個所の点検、消毒の徹底など、通常行っている基本的な対策をより丁寧に実施していたとのこと。

6 野鳥・野生動物対策

- ① 農場主によると、農場周辺はカラスが多く、見つけた時は爆音で脅かしているとのこと。なお、農場内ではネコ等の野生動物は見かけることはないとのこと。調査時、当該農場周辺の雑木林や水田等で多数のカラスを確認した。
- ② 農場主によると、鶏舎内でネズミはあまり見かけることはないとのこと。調査時、鶏舎内でネズミの死体を確認したが、ラットサインは多くなかった。

（以上）